

親「全共斗」、反共・反民青攻撃で繕らった「民学同」 の権力美化の総路線を粉碎せよ！

11/27 大学院民主化斗争委員会

残存することに、我々が先に展開した民学同の大学斗争論批判、安保斗争論批判の前に、彼らはすつかり沈黙を許している。今年5月、「全共斗」と互いに競い合い「○○○破産宣言」を掲げ出して以来彼らがい、「五波」(?)「悪魔と規約」と10月8日の杉本ポリボックス横断の内閣バ警官に仲裁されたが、その関連を「理論化」しているのでもあろう。だが、理論批判の前には「沈黙は金」とばかりの態度の「民学同」もその策動を止めなければ。対「全共斗」新政策、つまり「全共斗」を「問題提起者」とみる立場から、彼らとの「統一行動」に大学斗争の意を見出さず、また、「課題と基本戦略の一致に基づく行動」の名の下に、社会党・共産党 談評を中代とした統一戦線の結成阻止する動きも止めなければ。したがって、我々は再び(々)度 民学同の大学斗争論、安保斗争論及びそれに繋がる権力美化論を批判する。

我々が9月22日付のじらを「民学同」の構造改革路線に基いせ、批判を人民による国家権力獲得以前に徹底した大学の民主主義的変革が可能であるとの「つ」に主張するが、これこそ「資本主義社会においては、全面的に資本の意図を貫徹する」という『全共斗』の『理論』の全くの裏返しである。よと指摘したことに對して民学同は、何の脈絡もなしに「その論理は全共斗と瓜二つである」となって「批判」したことがある。我々はこれを批判者批判のしかたを批判するつもりは毛頭ない。だが、せめて我々の論理や「全共斗」の論理を少しは知ってから批判すべきであらう。「全共斗」は、他にもいくとも思想的基盤を「アナーキズム・ニヒリズム・実存主義・マラニキスム」におきつつ、「大学解体」を叫ぶく解法したあとはどうするかなという現実的展望を一切示さず、「糾起否定の論理」のつらひ観念の遊戯のうちに革命重初を解消してきた。この糾起否定の遊戯によって、現実の学生・院生の切実な要求の實現、すなわち双闘斗争の全面的に否定される。これこそ「全共斗」・トロツキストの本質の一面をばらばらした。我々はこうしたたぬらぬら路線と真向から斗争すべきだ。双闘斗争と革命斗争を正しく結合し、強さを統一戦線を結成することこそ重要であることあり、「全共斗」においては、この人民の統一戦線を破壊することにその最大の狙いがあるのだ、ということも我々は明らかにしてきた。民学同は、この「つ」には「全共斗」をとらえない。「全共斗」・トロツキストが主観的にも客観的にも権力の失策をあることは、背叛社事件、落院で「全共斗」と共産党との癒着等々の事実、さらにこの統一行動における社共総評の示唆への右翼的りのつらひと二つをとりこ、その現象的にも最高さいつある。それにも拘らず、民学同のゆかんだ眼には「全共斗」はただ、戦術を果にする民主勢力の一部に見えるらしい。この眼を民学同批判の不可欠の前提として指摘しておいて、次に、民学同の「権力奪取以前に要求を貫徹する」ということを意味することをも述べよう。

大学は、資本主義体制の下で存在する以上、国家権力の、異なる階級間の対立を調停する役割をもち、資本階級の利益を代表する。また、支配階級の思想を支配的意識」(ロドイソ・イデオロギー)となり、その思想はどこまで生産されるかといえは、一つには、まさに大学においてである。したがって、資本主義国家権力は、大学に対する官僚統制を絶えず強めてこざるを得ないのである。ここに学生、人民は自らの利益を掲げて斗争に立ちあがらざるを得ない必然性があり、なとして、民主化の前進と人民に奉仕する学同・科学の創出をなちとるつとる学生、人民の統一戦線と国家権力とが大学を隔として絶えず抗争することとなるのである。大学はこの「つ」に、資本主義体制下に存在する限り、その内部に非資本主義的の部命を合致抗争の場がある。ここに双闘斗争の重要性が存在する。ところが民学同は、資本主義下においてこの抗争が止揚できる=徹底的な変革が可能であると主張する。この主張が成立するためには①国家権力の中立性の承認②民学同のいう要求がさだめて低次元の、学生、人民の要求を満たしえないものであること、この二つがいずれも承認されなければならぬであろう。民学同はまず①については「構造改革論」によりこれを承認する。つまり、国家権力を依然として根拠体が握る。という場合でも、労働者階級が力でのこの国家権力をおさえつげて大学に手を出させないつにつし、管理のハンドルを学生、人民の手にするといふのだ。なんとお目出度い議論であろうか。これは資本主義的国家権力の進化以外の何物でもないであろう。②については、民学同諸君、君たちの「要求論」を展開してみよ。さうすればいかに君たちの「要求論」が低次元のものであるか明らかになるであろう。以上見てきたように、民学同の我々に対する批判は、まさに権力の本質をみない、というよりそれに媚びる自己入書を書き立てるにすぎない。彼らば「権力の側面に居る」と無因縁に反民青攻撃を叫んで、それはお笑い草にしかたない。

このように、既成的には権力を美化する民学同の、戦術的には一戦して、「全共斗」のように「入戦阻止」とまでは言わないが、善い果「全共斗」に類似した「全共ストライキ」「授業時間外研

「諸々の政策を提起し、その方針についていけぬ一歩を切。て捨ててまでも「左翼的」に対応して
きた。そしていよいよ、実働的に「大学解体」→「反動的自衛」の成線に道を開く「全管理機構の全面
公開」等の音頭をとっている。ではなぜ彼らはこうした方針をとるのだらうか。それは彼ら依然と
して、すでに歴史的にも破産した「層としての学生運動論」に立脚しているからである。この見地は
、学生を政治的に均質な層として把握し、学生も自身階級、要求、見解等の多様性をみない。彼らは
学生の中に一定存在している小ブル急進性・幼稚性を人民の統一戦線の中で克服する戦略・政策をも
てたいから、学生のことしに弱点を克服するよう学生を指導するのはよく、逆にその弱点に依拠
し、そのことにより組織的伸張を図ろうとしてきたのである。我々は必要に応じて政府側面や排外
分子の翻顔等を正しく判断しながら、斗争を盛り上げるためにストライキもすること一面的に否定
しけしむが、斗争を前進させる根本は、学生が積極的で強い自治運動、および自治会、F、ク
ラブ、Fに固く固結すること、そしてそれらを基石として築かれる学生、院生運動と人民との連帯を
正しく保っていることの方にある。と何層も指摘してきた。この戦術こそ、運動および組織方針の
中軸にならねばならない。

戦術の美化、「左翼的」の戦術=体の上半身は石を向き、下半身の左を向く奇怪な化物、これは彼らに
限らず人民党同の姿である。